

三田評論

MITA-HYORON
11
2016 No.1205

特集

ベルギー友好150周年



慶應義塾

「角川映画」 と塾生時代

たかやなぎりょういち
高柳良一（ニッポン放送総務部長兼員）

昭和五十六年一月三十一日は、私の十七歳の誕生日であり、また人生が大きく変わった記念日でもある。この日は、角川映画「ねらわれた学園」、薬師丸ひろ子相手役の最終オーディションの日であった。

当時は、素人が登場するテレビ、ラジオ、雑誌の企画が流行っており、塾高生らもちよくちよく登場しては、注目を集めていた。その程度の軽い気持ちで応募したために、まさか自分が相手役に選ばれるとは思わず、報道された翌日に登校すると、「高柳良一ってどんなやつだ？」と、学校中から生徒が教室に押し寄せ、大変な騒ぎになってしまった。

その日は、ちょうど漢文の授業があったのだが、休み時間にクラスの一人がふざけて「瞳みのるVS高柳良一スター対談」と、黒板にいたずら書きをした。高校二年の時の漢文は、人見豊先生に習っていたのである。

当時、ザ・タイガースの再結成が騒がれていたが、芸能界に復帰する気のない人見先生は、頑なに取材を拒まれており、黒板を見た時には、さぞかし不快な気持ちになったのではないかと、申し訳なく思い、授業の後に改めて事情を説明しにうかがったところ、「ああ、君がそうか。頑張りなさい」と、温かく応援していただき、ほっとしたことは、鮮明に記憶に残っている。

その後、再び「瞳みのる」として芸能活動を再開され、四十年ぶりにメディアに登場されたのが、私の現在の勤務先であるニッポン放送のラジオ番組であった。不思議なご縁によって、人見先生と三十年ぶりに再会し、当時の思い出話に花が咲いた。

人見先生に関連したユニークなエピソードを、もう一つご紹介したい。角

川映画「時をかける少女」には、漢文の授業のシーンが登場する。私も生徒の一人として教室でその授業を受けているが、教師役は岸部一徳さんであった。つまり、現実の世界では、私は人見豊先生の漢文の授業を受け、映画の世界では、岸部一徳先生の漢文の授業を受けているのである。

世界でただ一人、ザ・タイガースのメンバーの二人から漢文を教えてもらったというのが、私の自慢である。

「ねらわれた学園」は、高校二年の春休みに撮影され、公開されたのは高校三年の夏休みであった。ちょうど公開の翌週が修学旅行であったが、記念写真を撮影していると、他校の修学旅行生やバスガイドさんたちが、みんな私に気づくのである。なぜだろう、と不思議だったが、簡単に謎は解けた。修学旅行には当然のように、塾高の制服で参加していたが、映画にも詰襟の学生服姿で登場しており、つまり私は映画の衣装のまま、観光地を歩き回っ

ていたのであった。

この年一九八一年「ねらわれた学園」は、十二億円を超す配給収入を記録する大ヒット映画となり、私は続けて栗師丸ひろ子の主演作「セーラー服と機関銃」への出演を誘われていたが、考えた拳句に断つてしまった。それは、自分の意思ではなく俳優としてデビューしたことで、自分の人生が自分ですントロールできないような不安にかられたためである。冷静に考えようと、いったん活動を休止したものの、様々な場面で、デビュー前には戻れないことを痛感し、大学入学と同時に活動を再開した。それが、原田知世のデビュー作のテレビドラマ「セーラー服と機関銃」であった。

高校二年の終わりから、大学を卒業するまでの五年間に、アニメを含む八本の角川映画に出演したが、慶應義塾生であったからこそ、二足のワラジが許されていたのだと、今さらであるが感謝している。

そして、卒業と同時に、今度こそ本

当に引退したのであるが、日本の映画史の中で、光り輝く時代のまっただ中に、その時代の代名詞とも言える角川映画の俳優として自分も存在していたということは、一生色褪せない宝物であり、今でも心から誇らしく思っている。

ワーカーズ・コレクティブで「共に働く」

なかむら ひまこ
中村久子 (NPO法人ワーカーズ・コレクティブ協合理事長、熟員)

麻布で育った父が結核の転地療養で移った葉山が私のふるさとです。家の近くには小川や田んぼがあり、春には見渡す限りのれんげ畑で遊んだものです。近所に子供が少なかったので、片付けや掃除、そして草むしりなどが遊びの代わりでした。

熟では図書館情報学を学び矢上台の

理工学情報センターで七年間勤務、出産を機に退職し専業主婦として子育ての日々を送りました。子供たちに素性が確かで安全な物を食べさせたいと生活クラブ生協に加入したことから、人生は大きく変わりました。この生協は生産・消費・廃棄まで、共同購入活動を通して組合員一人一人が責任をもつ、新しい経済の仕組みを創ってきたことが評価され、一九八九年にもう一つのノーベル賞と言われる「ライト・ライブリフッド賞」を受賞しています。自主運営・自主管理の活動は、それまでにない体験の連続で、皆で議論し活動する中で、自分で考え自分で決めるから責任を負えることの面白さを知り、高校時代から鍛えたバスケットボールのフットワークも功を奏して、地図を片手にまちを歩く市民活動に励みました。

子育てが一段落して、司書の仕事に戻るが地域活動にシフトするか随分悩みましたが、自分が住み暮らす地域で動いてみたいと、一九九八年二月に一